

# アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



アントワーヌ＝ルイ・バリ  
《ライオンと蛇》  
一八三八年 フロンズ  
二一・三XIII・〇X一八・五B

ライオンの無慈悲でたくましい右足に踏みつけられた蛇が、猛然と鎌首をもたげ、雄叫びを上げている。しかし、野生の対決は百獣の王に軍配が上がり、その口からは勝利の咆哮が洩れているようである。ライオンの鬣や毛並みの線状の表現、突出した背骨や力を秘めた筋肉などの自然味あふれる描写は、動物解剖学書の読書、自然史博物館の解剖学ギャラリーや動物園での観察・素描など、たゆまぬ研究によって生み出された。結果、バリは、従来他の主題に比べて低く評価されていた動物彫刻の地位を引き上げることに貢献し、一時期、若きロダンの師ともなった。当館所蔵作は、作者の名を普及するのに役立つ縮小版である。サイズのなせるわざか、野生の緊張感とともに、どこか可愛らしさも感じさせる。

(上席学芸員 南美幸)

No.  
**125**  
2017年度 | 春 |

# 静岡県美を去るに当たって

前館長 芳賀 徹

二〇一〇年三月初旬の一夜、静岡県知事川勝平太氏から拙宅ににわか電話があった。

静岡県立美術館の館長宮治昭氏が急に他に移されることになったので、その後を引き受けてくれ、とのことだった。川勝さんとは京都の国際日本文化研究センター以来の親しいかかわりがあったし、当時私が勤めていた愛知県岡崎市美術館館長の職はもう十一年目になっていて、辞めどきでもあった。ただ岡崎では私自身の年来の研究主題であった「東アジアの桃源郷」が次の年の企画展としてすでに決まっております、これを放棄するわけにはいかない。なおしばらくは両館館長の兼任をお認めいただいた上で、私は静岡にきたのである（岡崎では翌年春、東北震災と福島原発瓦解の危機に遭い、とくにアメリカ所在の桃源図名品の借り出しに何通もの英文書簡を書き、冷汗のかきとおしだった）。

思い出の多いあの年からまる七年、静岡の方々からは館の内外でほんとう

に懇切なお世話を頂いた。川勝知事や県庁の文化・観光部の人々には、ことあるごとに県美の外に引張り出して貰って、この「富国徳」の県の夢と志をわすかなりと分かちもつ機会を与えて頂いた。静岡市の商工会議所では、後藤康雄前会頭をはじめその周りに、ビジネス・エリートながら現代最良の

教養人として勉強好きな人々が多く、はじめて財界というものに接した私は感嘆した。早くから「徳川みらい学会」を組織して、徳川宗家十八代の御当主徳川恒孝氏御夫妻を頭に家康没後四百年の記念事業を次々に推進し、二〇一六年の私たちの「徳川の平和」展の企画を一貫して支えて下さった。

何回か任期延長をして副館長をつづけてくれた坂田芳乃さんをはじめ、前学芸部長の小針由紀隆氏、現学芸部長の泉万里さん、また代々の総務課長と課員たちには、五年前の私の長期入院期間なども含めて、毎週毎月実にごまやかな御配慮を賜った。いまや女性優位となってきた学芸課員十名に対して

と同様に、その友情にここであらためて厚く御礼を申上げる。だがこうして御礼ばかり言っていると皮肉屋の学芸部長あたりにもまたからかわれる。ここでは主として学芸部に対して今後への注文を数ヶ条だけ追記しておこう。

(一) 研究会―毎月一回学芸課員必須の仕事として研究中の課題についての報告会があることは非常にいい。本館の質の高さを保証する伝統だ。だが私が館長として参加するようになった初めの頃は、三十分ないし一時間弱の発表の後に、列席の同僚からはなんの質問も意見も出ない沈黙の席だった。私は驚きかつ呆れた。三十、四十の齢になり研究者を自称しながら、一言もないこの不様さは一体なにぞだ、と腹が立ちさえした。ここ数年來、泉部長らの配慮によって発表者に対するこの無礼・不躰ぶりは改良されてきた。私はこの研究会が館運営の基本にかかわる討議の場とまでなることを期待している。

(二) 官僚臭―右と裏腹のことかもし

れない。私はごく最近某新聞の有能な美術担当記者から聞かされた。なにか借りたものか訊きたいことがあって彼は本館に電話した（詳細不明）。すると担当の学芸員はけんもほろろにこれを断って電話をガチャンだったという。仲間うちでは無言か囁きあい、外に対しては威張って突慥貪。これをお役人臭などといったは県庁や県立図書館の人々に対して申しわけない。これは当館学芸課の自閉性、井の中の蛙ぶりの露呈にすぎまい。大いに反省を要する。

(三) ロダン館への渡り廊下―マイヨール、カミュー・クロードルからジャコメッティに至るロダン以後の近現代彫刻の展開を示す、あの貴重な十数点の展示。これらの作品がなぜここにあるかについては一言の説明もない。観客に対するこの横柄ぶり、無愛想さについて私は昨春も少々書いた。だがその後みずから改善も進めぬままに私に館を去る。まことに申しわけない。

まだ他にもあるが、以上のイヤミ・数ヶ条は館長でなければ言えないことのはずだ。静岡県美の県に向かつて、国に向かつて、世界に対してのさらなる開放性によるさらなる貢献をこそ願って、私はこの桜咲く山を去る。長年、ほんとうに有難うございました。

## 腕輪の記憶

## 〈県美の未来に期待〉

前副館長 坂田芳乃

これは現実? 「芳賀館長を補佐して頑張ってください」と、知事から県立美術館勤務の内示を伝えられた日のことを今でも鮮明に覚えています。

その日はもう一つ、中学校の美術の授業で「包装紙のデザイン」を机の上に広げたとき、「これは、お前の作品ではない」と、いきなり先生に怒鳴られました。私の作品に間違いはないのですが、誤り有り、別のクラスの生徒と私の二つの作品を、眼光鋭く同一人物の作品と見破られてしまった一コマが記憶の中から蘇ってきました。これまで、美術とは距離のある生活をしてきた私には「考えもしなかった美術館勤務」のスタートでした。そんな私に、丁寧に作品解説や美術館の状況を説明してくれた学芸員諸氏に心から感謝しており、今では、美術館に勤務できた幸せ感に浸っている我が身を振り返ると、この変化に我ながら呆れるばかり

です。

本県は、これまで県立博物館がなく、年に一度当館で文明展を開催してきました。文明展では、具合が悪くなる職員が出たり、作品に不調があったりとか何か起きると聞き、私はお守りのつもりで、二〇一二年「草原の王朝契丹」展からプレスレットを身につけはじめましたが、大切な職員を病気で失うことが腕輪の記憶の始まりになりました。

よちよち歩きの広報委員会も職員の情報を得るまでになったこと、開館二十五周年には、「東日本大震災応援プロジェクト」で東北とつながり、芸術の力を発揮できたこと、翌年には、館長が大病のち不死鳥のように復活したこと、ロダン館二十周年では、工業技術研究所の博士たちによる「考える人」の精緻な3D計測で、オリジナル商品開発がスタート、私事ですが、周

年セレモニーが終るのを待って、膝の上で息を引き取った黒猫の恩返しとも思える行動、周年に合わせたロダン作品寄贈が泡のごとく消えたこと、開館三十周年では、当館出身で日本を代表するロダン研究者であった学芸員のご家族との出会いにより、「ロダン館の今とこれから」を考え始めたこと、「徳川の平和」展図録が、美術館連絡協議会の「優秀カタログ論文賞」を受賞し、三十周年に花を添えられたこと、三十周年の事業をやり通した職員のこと、経済界主導の「徳川みらい学会」と館長の交流を通じ、経済界が美術館の良き理解者となってくれたことなど、腕輪の記憶が時に過去を呼び戻してくれます。

本年「ロダン没後百年」にあたり、担当の学芸員が「ロダン連続小企画」展を計画しました。この企画を応援すべく、職員総力で様々な切り口で没後

百年を開催します。私も応援団の一人として「考えるチョコ」を開発中。出上がりを確認できませんでしたが、どうぞお楽しみに。

さて、「ロダンはまだ古い、ロダンは素晴らしい」と両面から評価されますが、どちらも事実でしょう。二〇二〇年「東京オリンピック・パラリンピック」には、多くの外国の方も来静されます。「ロダン・ロダン館」もまた静岡をPRする大きなテーマであり、ロダン没後百年の節目に新たな視点を加え、ロダン館と今後どう向き合っていくのか、職員自らが考えてほしいと思います。

今を生きる美術館であることは勿論、未来に向かって存在感のある「文化の拠点」であり続けられるよう、県民のシビックプライドとして存在し続けられるよう願ってやみません。

頭と口が直結する私を、広い心で応援してくれた館長はじめ、県庁や美術館の職員、スタッフ、ボランティア、友の会の皆さんとの日常は印象深いものでした。これまでお世話になりました多くの方々へ感謝申し上げますとともに、皆様の更なる活躍を祈念いたします。

# 黄金のファラオと 大ピラミッド展

平成29年4月9日(日)～6月25日(日)

およそ四五〇〇年前、古代エジプトの古王国時代(紀元前二六八六～二一八五年頃)に、クフ王(紀元前二五八九～二五六六年頃)、カフラー王(紀元前二五五八～二五三三年頃)、メンカウラー王(紀元前二五三二～二五〇三年頃)ら三人のファラオによって、今日のギザに巨大なピラミッド群が建設されました。本展はこの時代を中心に、エジプト国立カイロ博物館から一〇〇点あまりの作品を将来し、ファラオや王家の女性、貴族、そしてピラミッド建設を支えた人々の暮らしなどについて、その全容に迫るものです。

これまでのエジプト展は、この文明が続いた数千年を幅広く取り上げるものが多く、最後の王朝プトレマイオス朝(紀元前三〇五～紀元前三〇年)まで、様々な時代の作品が紹介されてきました。それはそれで、エジプト文明の巨大な厚みを感じる事が出来る、素晴らしい機会だったのですが、本展はピラミッドとその建設を支えた人々の暮らしや思いに焦点を絞ることで、必然的に古王国時代の作品を数多くご紹介することになりました。この時期の優品をまとめて鑑賞する機会は、日本国内では稀です。

出品作の中でも、《アメンエムオプト王の黄金のマスク》は、世界三大黄金のマスクの一つであり、見逃せないものです。静岡県立美術館では二〇〇一(平成十三)年度にもう一つの黄金のマスク《プセンネスI世の黄金のマスク》を展示していますから、本展にご来場頂けば、三つのうち二つまでを、この静岡の地でご観覧頂くことになる訳です。残念ながらラツタンカーメンの黄金のマスクは来日しませんが、会場内の4K映像シアターでは、この門外不出のマスクを鮮やかな映像でご覧頂きましょう。

当時の女性を華やかに彩った、装飾品も見所の一つです。《クヌムト王女の襟飾り》のような作品には、職人の精巧な技術と、今日もお新鮮さを失わないセンスの良さが感じられます。

本展では、ピラミッドを作った人々の姿も、色々とお楽しみ頂けます。本展監修者である吉村作治氏は「当時エジプトには奴隷はいなかった。すなわち、国民の99%を占める農民が当番制というか割り当て建てたのである。ピラミッド建設に関わることは農民にとって大変喜ばしいことで、ファラオと共に来世に行けたのである。すなわち、これら農民に指示を与える指揮官もいたし、道具を作る者、作業中、水を配る者、食事を作る者、それを配膳する者等々たくさんの人によって建設されたのである」と書いています。《パン造りとビール造り職人の模型》は、日常生活を表わしており、副葬品



《クヌムト王女の襟飾り》  
中王国時代、第12王朝、アメンエムハト2世の治世(紀元前1911～1877年頃)



《アメンエムハト王の黄金のマスク》  
第3中間期、第21王朝、アメンエムハト王の治世(紀元前993～984年頃)



《パン造りとビール造り職人の模型》  
中王国時代、第12王朝(紀元前1985～1773年頃)

として墓に納められたものですが、このような作品からも、当時の暮らしを彷彿とすることが出来るでしょう。ビザンティウムのフィロンが挙げた「七不思議」の内、唯一現代でも見ることが出来る、エジプトのピラミッド。是非会場にお越し頂き、その驚異を取り巻く様々なドラマをご覧下さい。

(上席学芸員 新田建史)

# 日本画入門! + 蔵品展 + 白の表現力

平成29年7月14日(金)～8月4日(金)

夏休み特別展示として、本館展示室全てを使用し、三つの収蔵品展を同時開催いたします。

「日本画入門！」では、日本画に用いられる、画材、技法、形式という三つのテーマに沿って、江戸時代から近代にかけての作品、約三十点をご覧いただけます。画材や技法の基礎的事項に触れるとともに、普段以上に形式・細部にも注目し、より作品を身近に体感していただける展示となっています。

最初は画材がテーマです。日本画では、砕いた鉱石などを膠で溶いた岩絵

具が主として用いられます。そのほかにも、水墨画を中心に使用される墨や、装飾的に用いられる金も代表的な画材に数えられるでしょう。これらの画材の性質と効果を、実際の作品を通じて紹介します。

次に技法の問題に触れます。表現の基礎となる線は、力の入れ方やスピードによって、その太さなどを変化させることができます。そして同じ対象を描くにしても、輪郭線で象るほか、面で表す、表したい形を塗り残すなど、複数の方法があります。ここでは、作品を比較しながら、それぞれに用いられている線とその効果に着目します。

三つ目のテーマは形式です。日本画では用途によって様々な形式に仕立てられます。たとえば空間を演出する屏風、床の間を飾る掛軸、手に取り少しずつ巻きながら鑑賞する画卷などです。そして、この違いは画面のかたちや寸法を変えることになります。最後のコーナーでは、それぞれの形式に応じて、画家たちがいかなる工夫を加えて描いているかを実感していただきます。

ご家族でも楽しんでいただける親しみやすい内容であるとともに、選りす

ぐりの作品を展示しますので、美術ファンの方にもご満足いただけると思います。日本画への見方をより深めていただけたら幸いです。

そして、「新収蔵品展」は、当館コレクションに新しく加わった顔ぶれをお披露目する毎年恒例の展示です。平成二十八年度には、日本画、日本洋画、現代美術、合わせて四十件のバラエティに富んだ作品をご寄贈いただきました。これらをご覧いただくとともに、

昨年度購入することができた西洋版画二件も展示します。作品の詳細は次号の美術館ニュースにて掲載する予定です。

更に、当館収蔵品の中から、白、あるいは白に近い色に色数を絞り表現された作品を紹介する「白の表現力」(本展示に限り七月十四日～九月三日)も開催します。取り上げる作品は、いずれも日本および韓国の現代作家によって制作されたものです。本展は二〇一五年夏に開催し、好評を得

た同タイトルの展示に一部変更を加えた内容となっています。

七月十四日(金)から八月四日(金)まで、収蔵品展料金(大人三〇〇円、大学生以下・七十歳以上無料)で、古美術から現代アートまで、これら三つの企画を一度にご覧いただける大変おトクな機会です。短い期間ではありますが、夏限定の豪華なアートの競演をお楽しみください。

(主任学芸員 浦澤倫太郎)



伊藤若冲《花鳥蔬菜図押絵貼屏風》(個人蔵)

# ピラネージ『古今ローマの様々な景観』 に見られるクローズアップについて

上席学芸員 新田建史

ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ（一七二〇〜一七七八）は、十八世紀のローマで活躍した版画家、建築家、そして考古学者である。一七二〇年にヴェネツィア近郊メストレで生まれた彼は、二十歳の頃にローマにやってきて、数回故郷に帰るものの、ローマに定住し、都市ローマの風景や、古代ローマの遺構等を描き続けて生涯を終えた。

初期の大きな影響源として、当然ながら景観画や景観版画の先行作例、劇場の舞台デザインや親類筋の建築家等が挙げられる。これらの内、ピラネージ以前にローマで流通していた景観版画との具体的な比較は、何故か殆どされないようである<sup>1</sup>。

この小論では、ピラネージがその最初期に参加した作品集『古今ローマの様々な景観 *Varie vedute di Roma antica e moderna*』(Roma, Fausto Anidei, 一七四五年刊行) 所収の作品を取り上げ、彼が景観版画の先行作例をどのように消化しようとしていたかを論じてみたい。この作品集には、全九十三点の内、ピラネージ最初期の景観画五十一枚が含まれている。一七四〇年にローマへやってきたばかりのピラネージは、まだ独自の作品集を刊行することなど出来ず、当時幾つかの出版物で挿図を描いていたフランス・アカデミーの学生たちの紹介を得て、この作品集に参加したものである<sup>2</sup>。

まずご覧頂きたいのは、『フェリーチエ



図1 ピラネージ《フェリーチエ水道終点の泉の景観》



図2 ファルダ《ヴィミナーレの丘の噴水とカステッロ》

水道終点の泉の景観》(図1)である<sup>3</sup>。この作品を、同じ場所を描いたジョヴァンニ・バッティスタ・ファルダ(一六四三〜一六七八)による先行作例《ヴィミナーレの丘の噴水とカステッロ》(図2)<sup>4</sup>とを比較してみると、ピラネージが舞台デザインを応用していることがよく分かる。ファルダの作品が、この眺めをフレームで切り取るように描いているのに対し、ピラネージの方は、まず手前左端、そして広い

空間を挟んで右端やや奥に建築を配することで、画面を囲うような効果を作り出している。さらに、主題である中央の泉には、

急激に後退していく透視図法を用いることで、迫力ある画面を生み出している。バロック期の劇場は奥行感のある舞台を作り出すために、舞台の両袖から中央に向け、少しずつせり出す様

に層状の書割を重ね、さらに極端な2点透視図法をしばしば用いるが、そのやり方が建築物や視点の配置に応用されているのである<sup>5</sup>。

一方、全く別の反応を示している場合がある。例えば《ヴィラ・パンフィーリの景観》(図3)には、やはり全く同じ場所を描いたファルダの先行作例(図4)<sup>7</sup>がある。比較してみると、同じ場所を描くことになったピラネージが、角度をほぼそのまま踏襲しつつ、クローズアップして建物を切り出しているのが分かる。庭園とセットで名の知れた建築物を、わざわざ切り出して描いているのである。

『古今ローマの様々な景観』を通して見てみると、ピラネージが先行作例から対象を



図3 ピラネージ《ヴィラ・パンフィーリの景観》



図4 ファルダ《パンフィーリ公のパラッツォと庭園》

切り出してしまうのは、本作品一点に限ったものではない。ヴィラ・メデイチやヴィラ・ルドヴィシを描いた作品にも、やはりファルダと思われる作品を下敷きにしたクローズアップが見て取れる。<sup>11</sup>

これら三つの作例に共通しているのは、ファルダの作例がいずれも、かなり広々とした空間と建築物とを、組み合わせで描いていることである。

ピラネージがイメージを描き出す際の基本的な態度を、以前私は、以下のように論じたことがある。

「ピラネージの場合、景観画の大部分の作品は視点を低く下げ、画面の周囲にモチーフを配することで画面を縁取っている。さらに中心となるモチーフを大胆にクローズアップすることで、画面に強力な奥行感と、見る者に迫ってくるような迫力とを生み出している。「中略」この構図がピラネージがイマジネーションを働かせるための枠組み、いわば深淵に飛び込むためのジャンプ台のようなものだったのではないかと感じさせる。「中略」奥行感を強調すると同時に前景のモチーフの量塊感を際立たせる、それは画面の中に、穴を穿っていくような作業である。」<sup>12</sup>

冒頭に見た《フェリーチェ水道終点の泉の景観》(図1)では、既に「このような態度を作り上げつつあるように感じられる。だが、『古今ローマの様々な景観』の図版を製作していた二十代前半の段階では、ピ

ラネージもこのような画面を、安定して作り出すには至っていなかったのではあるまいか。ピラネージによるクローズアップの手法は、ファルダによる先行作例、実景、そして自身の欲求との狭間で、量塊感と奥行きという要素を表現する手法を探りつつあった彼の、折衷案だと思われる。ほとんど苦しい紛れだと言っても良いのではないだろうか。

後に他を圧倒する迫力を持つ画風を確立するピラネージだが、その初期作品を同時に置き直してみることで、彼が「実景」とどのように向き合ったのか、私達にも改めて感じ取れるように思われる。

- 1 1978 WILTON-ELY, John. *The mind and art of Giovanni Battista Piranesi*. London, Thames and Hudson, p. 128, note 3. には、景観版画の先行作例との関係に、わずかながら触れている。多くの研究では、本文で述べたフランス・アカデミー学生作品や、ピラネージが師事したと言われるジュゼッペ・ヴァージに比較されるものが多く。
- 2 この点数は「1994 WILTON-ELY, John. *Giovanni Battista Piranesi. The Complete Etchings*. 2 vols. San Francisco, Alan Wolsky fine arts, p.90. による。この作品集所収の作品は、他の初期作品との関連については1970 ROBINSON, Andrew. "Giovanni Battista Piranesi: prolegomena to the Princeton Collections". *Princeton University Library Chronicle*, XXXI, no.3, Spring, pp.165-206. 参照。
- 3 前掲1994 WILTON-ELY, no. 71.
- 4 1677年刊行の *Le fontane di Roma nelle piazze*

*e luoghi pubblici della città, con li loro prospetti, come sono al presente. Disegnate, et intagliate da Gio. Battista Falda. Date in luce con direzione, e cura da Gio: Giacomo de Rossi, dalle sue stampe in Roma, alla Pace con Priv. del S. Pont. 所収。*

5 バロック期の劇場マサインについては、1950 SCHOLZ, Janos. (ed.) *Baroque and Romantic Stage Design*. New York, H. Bittner and Company 1975 OESLAGER, Donald. *Stage Design, Four Centuries of Scenic Invention*. London, Thames and Hudson. 等を参照。

6 前掲1994 WILTON-ELY, no. 86. 描かれてるのはローマの中心地にあるドリア・バンフィーリ宮殿ではなく、シヤニコロの丘にあるドリア・バンフィーリ公園にあるヴィラのこと。

7 やはり一六七七年刊行の *Li Giardini di Roma con le loro piante alzate e vedute in prospettiva. Disegnate ed intagliate da Gio. Battista Falda. Nuovamente dati alle stampe con direzione e cura di Gio Giacomo de Rossi, alla Pace all'Insegna di Parigi in Roma con Priv. del S. Pont. 所収。*

8 画題としてのこの場所の選択は、ピラネージではなく出版者の指示だと考える。『古今ローマの様々な景観』では、作品だけではなくおそらく銅版まで、全て出版社に納品したらしいことから、ピラネージの立場は弱かったことが伺われる。前掲1994 WILTON-ELY, p. 90. 参照。

9 1994 WILTON-ELY, no. 85.

10 1994 WILTON-ELY, no. 87. ベンチョの丘にあったが現存しない。アメリカ大使館のあるパラッツォ・マルゲリータの一部となつて残っている部分がある。

11 今のところ、ファルダより遡る構図の原型は見出しづれないが、可能性は否定出来ない。

12 二〇〇四抽稿「景観図・平面図・眺望図」ピラネージの作画態度について」『静岡県立美術館紀要』平成十五(二〇〇三)年度、第十九号、p. 33.



本の窓  
『くまのぼりす』  
ディック・ブルーナ文・絵  
まつおかきょうこ訳  
福音館書店 二〇一三年

今年二月、ディック・ブルーナが、故郷オランダのユトレヒトで、八十九年の生涯を閉じたという報せが届きました。昨夏の企画展「美術館に行こう！ディック・ブルーナに学ぶモダン・アートの楽しみ方」を通して、ブルーナの魅力に新たな目を開いたひとりとして、心よりご冥福をお祈りします。

数あるブルーナの絵本の中で、私が好きな一冊は『くまのぼりす』です。うさこちゃんの友だち・ぼりすは、冬の到来を感じて薪の支度を始めます。仕事を終え、汗を流し、トマトスープの夕食をとったあとは、暖炉のぬくもりに包まれながら読書の時間。自分の手と心をしっかりと働かせて丁寧になすべきことをなす、という暮らしは、深く清らかな味わいを残します。

(上席学芸員 石上充代)

## 冬を越して、雑感。

学芸課 臨時技術員 西畑春佳

昨年十二月より、学芸課の臨時職員としてお世話になっていました。福井からまいりました。金沢で学生生活を送っていた二〇〇四年に金沢21世紀美術館が開館したことは、同時代の美術というものを私が強く意識するきっかけとなりました。初めて北陸の地を離れ、静岡で暮らすことと、美術館で働くことができる喜びを謳歌しながら、学びと反省の日々を過ごしています。

地方には、住んでみないと気づかない魅力があります。今年、私は生まれて初めて雪のない冬を過ごしました。こんなにも暖かく、明るい冬があるのだということを知りました。静岡人の、穏やかで朗らかな人柄と、豊かな文化がこのような環境の中で育まれていることにも頷けます。

秋から冬にかけて、北陸地方は鈍色の低い雲に覆われます。「獅起こし」と呼ばれる雷鳴がどろき、「弁当忘れても傘忘れるな」というくらい天気が変わりやすく、しよつちゅう雨雪に見舞われます。不慣れた生活を強いられますし、鬱々とした気分になりやすくなります。ところが、雨上がりに雲間から強い陽光が射し、放射状に光線が広がる「薄明光線」という現象がよく見られます。「天使の梯子」とも呼ばれ、凜



北陸の冬空に彩りを添える虹です (11月、坂井平野にて)

とした冷たい空気の中で起こるとてもドラマチックな光景です。オランダ・フランダールの風景画やマグリットの描いたベルギーの空が、当たり前に見ていた北陸の空によく似ていると気づいたのは、最近のことです。

これから新緑の季節を迎えるプロムナードの並木道を楽しみにしています。当館に向かう少しきついくらいの坂道は、新たな作品や人と出会うことへの期待を高めてくれるのです。

## 利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)  
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

## アクセス

- ◎JR「草薙駅」から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

テレフォン・サービス：054-262-3737  
ウェブサイト：<http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

無料託児サービス  
毎週日曜日および祝日10:30～15:30  
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2  
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767  
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



## 静岡県立美術館

Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

## 展覧会年間スケジュール

## 〈企画展〉

国立カイロ博物館所蔵 黄金のファラオと大ピラミッド展  
4月9日(日)～6月25日(日)

「日本画入門！」+「新収蔵品展」+「白の表現力」  
7月14日(金)～8月4日(金)(「白の表現力」は9月3日(日)まで)

2017年NHK大河ドラマ「おんな城主 直虎」特別展  
戦国！井伊直虎から直政へ  
8月14日(月)～10月12日(木)

美しき庭園画の世界—江戸絵画にみる現実の理想郷  
10月21日(土)～12月10日(日)

アートのなぞなぞ—高橋コレクション展  
12月23日(土・祝)～2018年2月28日(水)

## 〈収蔵品展〉

明治150年 静岡県美の明治洋画  
4月4日(火)～6月25日(日)

白の表現力  
7月14日(金)～9月3日(日)

シリーズ「ロダン没後100年によせて」

①「動き」を求めて：マイブリッジ、ロダン、オノデラユキ  
9月5日(火)～10月9日(月・祝)

②フォーカス！《地獄の門》：ロダンの彫刻写真(ファクシミリ)、  
安斎重雄による《地獄の門》  
10月11日(水)～11月12日(日)

③彫刻を撮る：ロダン、ブランクーシの彫刻写真  
11月14日(火)～12月17日(日)

富士山と静岡ゆかりの画家たち  
12月19日(火)～2018年2月28日(水)

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。